

## 絵画基礎の合同授業について

美術教育講座 東 慶太郎

### 1. 授業の概要

上記ふたつの授業科目は、学校教育実践コース（美術専修）・造形芸術コースそれぞれの1回生を主対象とした絵画分野の基礎実技（必修科目）である。しかし、学校教育実践コース（美術教育専修）と造形芸術コースでは、課程の教育目標、学生の学習目的・実技能力などが異なっており、昨年度までは、それぞれの課程に応じた別様のカリキュラムで2名の教員が実施してきた。昨年度までの授業内容は、各々つぎのとおりである。

学校教育実践コース（美術教育専修）の絵画基礎演習では、木炭デッサン・静物水彩・人物油彩など、写実的な絵画表現を多様なマテリアルによっておこなう体験型のカリキュラムが組まれていた。

一方、造形芸術コースの平面基礎演習は、翌2年次に平面基礎演習が絵画の基礎科目として開講されることもあり、美術全般の基礎実技としての意味合いを込めて、石膏デッサンのみを徐々に難度を上げて繰り返す追求型のカリキュラムが組まれていた。

これらふたつの授業が本年度から合同授業となったのは、講座の教員編成（担当分野）の変更というやむを得ない事情によるものである。実施するにあたっては、目的の異なる授業をひとつにまとめ、それぞれの学生の基礎実技科目として有意義な内容とするためにどのようなカリキュラムを編成し、指導内容をどう工夫するかという点が課題であった。

### 2. 受講生数と内訳

学校教育実践コース（美術専修）1回生	5名
造形芸術コース1回生	11名
造形芸術コース2回生	1名
造形芸術コース3回生	2名
他学部生（理学部）3回生	1名
計	20名

### 3. 授業内容（変更点と理由）

授業の概要で触れたように、学校教育実践コー

ス（美術教育専修）と造形芸術コースの学生では入学時点での実技経験が異なる。学校教育実践コース（美術教育専修）の受講生は若干キャリアが浅いと考えられる。また、造形芸術コースの学生が絵画・彫刻・デザイン・工芸のいずれかの分野で専門的な力を身につけたいと考えており、本授業はその基礎実技であるのに対して、学校教育実践コース（美術教育専修）の学生は、専門性を高めることよりも、将来教師になる上で必要な実践経験のひとつとして本授業を捉えていると考えられる。（実際には、個々の学生の目的や意欲は多様であり、一概には判断できない。しかし、課程が異なる以上、一般論としては、ある種の差別化は必要であり、各々の受講生の要望でもあるであろう。）

本授業では、これらの点に配慮して、昨年度までの平面基礎演習のカリキュラム（木炭による石膏デッサン）は廃止した。

しかし一方、学校教育実践コース（美術教育専修）の絵画基礎演習でおこなわれていた多様なマテリアルによる制作体験型の学習にのみシフトすることには問題があると考えられる。制作活動であれ教育活動であれ、美術（芸術）を通して学ぶべきことは本質的にはひとつのことに集約されるであろう。それはいわば制作実感とでも言うべきもの、言葉による理解を越えた、あるいは言葉には変換できないある種の感覚を体得することである。美術の要諦を言葉で理解することと、「造形力」「追究力」「見る力（指導力を含む）」などを体得することは別である。これらの力を身につけるには、広く浅く様々な体験を重ねるより、ひとつのことを繰り返しおこなう課題追求型の実習体験が必要であると判断した。

以上の理由により、今回の合同授業でのカリキュラムはおおよそ次のようなものとした。

#### 1. クロッキー（鉛筆など）

学生が交代でモデル（1ポーズ2分を5回）を務め、1回の授業でおおよそ60～80枚程度のクロッキーをおこなう。これはいわばウォーミン

グアップであり、次のデッサン実習に向けて「描くこと」に慣れる（気持ちの硬さを取る）目的でおこなった。また、今回は割愛したが、多様な描画材料を用いることでマテリアルの修得（描画感覚の違いを知ること）にも活用できると考える。

人体の全身を2分で描くには、集中力だけでなく、ある種の決断力のようなものが必要であり、緊張感・充実感が得られたようで、学生にはたいへん好評であった。また、学生が交代でモデルを務めることで、はやい段階である種の雰囲気作りができたことがその後の授業展開におおいに役立ったと感じている。

## 2. デッサン（鉛筆）

比較的最長い制作時間（4～6 授業時間）を設定し、画面追求力が身につくよう配慮した。ここでは、きれいに仕上げるのが重要なのではなく、追究することが重要であること、「描くこと」とは絵（描かれた形）が変化し動いていくことであることを繰り返し強調した。

## 3. 水彩画（透明水彩）

ここでは、絵とは対象物のみではなく画面全体であること、画面の色とは対象物の色の再現ではなく色彩相互の関係であることを重点的に指導した。具体的には、使用する色数を基本的な5色程度に制限すること、用紙の隅々まで絵具を置くこと、対象物（モデル）より背景に比重を置く気持ちで描くことなどを求めた。

## 4. 幾何形態（デッサンまたは水彩）

簡易なモチーフをもちいて、視覚の曖昧さ、不安定さを体感できるよう工夫した。

この他、映像メディア表現に関する授業をおこなったが、省略する。

また、1クール毎に完成作品の全体講評をおこない、受講生個々の課題や目標を明確化した。実習中は個別指導を繰り返し、中間講評は授業の最後に毎回おこなった。

## 4. 授業評価について

例年、受講生の要望に早期に対応すべく、学期の半ば頃に授業アンケートを実施している。

回答結果は翌授業時に公表し、授業者側の考え方・方針等の説明、アンケート結果についての感想や改善案等を示し、「授業の目的・意義」について受講者との相互理解を図っている。

しかし、本年度は、後に示すとおり、アンケート結果に大きな問題（考え方の違い等）がなかったため、特に長い時間を設けての意見交換はおこなわなかった。

なお、同様の調査は、担当する前・後期の主要

科目のすべてでおこなっている。

## 5. アンケート調査の方法

比較的少人数の実習であり、従来から、いくつかの設問に対する自由記述方式で調査をおこなってきた。

しかし、今年度は質問項目を設定せず、授業に関する感想を自由に記述するよう求めたところ、従来よりも文章量が多く、授業の感想や受講生自身の気持ちなどがストレートにあらわれる結果となった。少人数の実習授業の場合、今回のように自由に感想を述べさせた方が調査の有効性が高いように感じられた。

## 6. 調査結果（紙数の関係で、授業改善・評価に関係すると思われる箇所のみ記載する。）

- ・制作時間が最初に決まっていた方がよい。
  - ・勉強になるので講評に十分時間を取って欲しい。
  - ・講評やアドバイスの際の声を大きくして欲しい。
  - ・学生間での意見交換の場があってもよい。
  - ・描く時のポイントを教えて欲しい。
  - ・授業のペースが速すぎる。
  - ・課題にゆっくり取り組みたい。
  - ・進行のスピードも内容も丁度よい。
  - ・注意の仕方がよい。（きつくないのに的確）
  - ・遠慮なくアドバイスしてくれるのがよい。
  - ・自分の下手な絵にも真剣に指導してくれて、続けていこうという意欲が湧く。
  - ・石膏デッサンを先にやった方がよかったのでは。
  - ・おだやかな雰囲気が良い。
  - ・次の課題に移る前に参考作品を見せて欲しい。
- この他、設備・スペースへの不満が多くあった。また、口頭ではあるが、アンケート不要論が多かったことも付記しておく。

## 7. 総合的な感想（合同授業の効果と課題）

制作活動であれ教育活動であれ、「判断力」を養うには、自分自身の「見る」という感覚を確かなものにすることが重要である。本授業では、目的の異なる受講生が各々充実感を味わえる授業を展開できるかが課題であつたが、合同授業は予想に反してむしろ効果的であったように思われる。両コースの学生が影響し合いながら、各々の次のステップへの意欲を持たたのではないかと感じている。

本合同授業の今後の課題は、各々の学生の資質を伸ばし、創作・教育それぞれに関わる問題意識を高めるための目に見えない部分での緻密な対応であろう。